

ハイデルベルク信仰問答より

問 106 では、この戒めは、殺人についてだけ語っているのですか。

答え 殺人を禁ずるにあたって、神は嫉妬、憎しみ、怒りおよび復讐心などの殺人の根を徹底的に嫌い、これらすべてを隠れた殺人とみなす、と私たちに教えるつもりなのであります。

〔別訳〕

答え 神が、殺人の禁止を通して、わたしたちに教えようとしておられるのは、御自身が、ねたみ、憎しみ、怒り、復讐心のような殺人の根を憎んでおられること。またすべてそのようなことは、この方の前では一種の隠れた殺人である、ということです。

第六戒 あなたは殺してはいけない。(出 20:13)

「殺してはならない」という戒めは、実際の行為として守ることは多くの人にとって難事ではないかもしれませんが。殺人罪で服役する人はそれほど多くないでしょう。ただ、この世界では間接的な殺人も多く存在し、故意に引き起こされる戦争や生物兵器の拡散、輸出食品に危険農薬を散布することで輸入国の国民の健康に長期的な影響を与えていることなど、国際的な「殺人」が行なわれていることも事実として認識しておきたいと思います。

今日の間答では、より根本的かつ精神的なレベルにおける「殺人」の禁止について語られています。「嫉妬、憎しみ、怒りおよび復讐心」という人間の心に湧き上がってくる思いを「殺人の根」と捉えているのです。旧約時代のイスラエル人は「行為」としての殺人を行なわないことで神の法を全うしていると考えていましたが、その罪を精神レベルにまで落とし込んだのが主イエスでした。

あなたがたも聞いているとおり、昔の人は、『殺すな。人を殺した者は裁きを受ける』と命じられている。しかし、私は言うておく。きょうだいに腹を立てる者は誰でも裁きを受ける。きょうだいに『馬鹿』と言う者は、最高法院に引き渡され、『愚か者』と言う者は、ゲヘナの火に投げ込まれる。(マタイ 5:21-22)

ここでは「思い」だけでなく「言葉」による殺人も戒められています。「殺人」の適用範囲がこれほどまでに広げられてしまうと、言い逃れできる人はいなくなってしまうでしょう。主イエスがキリスト者に求める生き方は、このように「嫉妬、憎しみ、怒りおよび復讐心」という「殺人の根」を摘み取っていくことであり、負の連鎖の歯車に乗っからないことです。究極的には、「悪人に手向かってはならない。誰かがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい」(マタイ 5:39)という、主イエスが身を以て示された生き方に倣うのが主の弟子たちの歩むべき道であります。実際、パウロもヨハネも主の弟子として同様のことを教えています。

愛する人たち、自分で復讐せず、神の怒りに任せなさい。「『復讐は私のすること、私が報復する』と主は言われる」と書いてあります。(ローマ 12:19)

光の中にいると言いながら、きょうだいを憎む者は、今なお闇の中にいます。(Iヨハネ 2:9)

きょうだいを憎む者は皆、人殺しです。人殺しは皆、その内に永遠の命をとどめていないことを、あなたも知っています。(Iヨハネ 3:15)

ただ現実には甘いものではなく、社会で生きるとき憎しみが発現する状況に私たちは幾度も直面します。幼少期には親やきょうだいから受ける傷があり、学校生活では教師の無理解や同級生たちによるいじめ、大人になってからは職場におけるハラスメントなどを経験する人が多いでしょう。そのようなあらゆる状況にキリスト者として対応するとはどういうことなのでしょうか。

まず、キリスト者であるならばこういう行動はしないであろうという観点から。

- ・ 腹立たしい状況を見て見ぬふりをする。
- ・ 間違っていることを正さない。
- ・ 相手と同じ悪い言葉を投げ返す。
- ・ 相手の悪い噂を広める。
- ・ 他人を巻き込んで問題を大きくする。

次に、キリスト者であるならば積極的にこういう行動をするのではないかという観点から。

- ・ 悪意ある言行を投げかけてくる相手の中にある根本理由を考えてみる。
- ・ 話し合っ解決していけるようにアプローチする。
- ・ 自分の気持ちを文章に書いて整理する。
- ・ 客観的に問題を捉えることのできる人に相談する。
- ・ 自分の中にある課題に気づくきっかけ（成長の機会）とする。

キリスト者はこれらのことを主にあって行なうと同時に、「このようなき主イエスならどうなさるだろうか」と考え、聖書を調べ、聖霊の導きによって行動を選択していくことができます。また、何らか負の感情が湧き上がってくるとき、それは自分の中の未解決の問題が引き起こしていることが多いため、その「心の傷」と向き合うきっかけとすることも重要でしょう。自分の中に隠れている傷に気づいたら、それを「憎しみの根だ」と押し込めてしまうのではなく、癒し主であるイエス様の許へ持って行きましょう。憎しみが湧き上がらない人間はなく、神様はそのことを百も承知の上で私たちのすべてを受け入れてくださっています。怒りにコントロールされるのではなく、何度でも十字架の下に自分の偽らざる気持ちを持っていくことで、私たちの心は癒やされていくからです。